

【AJEQ2019 年度全国大会 (2019,10,6)】

## 対談：書くこと 旅すること

### Entretien : J'écris comme je voyage

Dany LAFERRIÈRE (Écrivain, Académie française)

ダニー・ラフェリエール (作家、アカデミー・フランセーズ)

Interlocuteur : TACHIBANA Hidehiro (Université Waseda)

対談者：立花英裕 (早稲田大学)

Présentatrice et interprète : OGURA Kazuko (Université Rikkyo)

司会・通訳：小倉和子 (立教大学)

立花 (対談者)：本題に入るまえに、ダニー・ラフェリエールさんはこの秋からアカデミー・フランセーズのナンバー 2 である *chancelier* (\*辞書によると「副会長」) という重要な役職に就かれたそうですが、これは実際にはどのような仕事なのか教えていただけますか。

ラフェリエール：「重要な役職」というのは本当でもあり、嘘でもあります。フランスのアカデミーは 5 つあり、科学アカデミー、文芸アカデミー、芸術アカデミー、道徳・政治アカデミー、そしてアカデミー・フランセーズですが、そのそれぞれに *chancelier* がいます。アカデミー・フランセーズでは毎週木曜の午後、全体会議が開かれますが、そのときに議長の横に座り、あたりを見回して、意見を述べるために手を挙げている人に発言権を与えるのが *chancelier* の役割です。それ自体はたいしたものではありませんが、私のようにハイチの独裁政権下で育ち、自由に意見を言うことを禁じられてきた者にとっては重要な意味をもった仕事です。

立花：そもそもアカデミー・フランセーズがどんなところなのかも、教えていただけますか。

ラフェリエール：アカデミー・フランセーズは 1635 年にリシュリュー枢機卿によって創設された機関です。フランス革命を経て共和国となった国にあり

ながら、その基本的仕組みは変わらず、40名の会員は今なお終身です。文学と政治の粋を集めることが目的で、ラシーヌ、コルネイユ、マリヴォー、ユゴーなど錚々たる作家が会員でしたが、それだけでなく、パストゥールのような科学者も名を連ねてきました。

私がアカデミーのナンバー2だというのは、chancelier だからではなく、座っている椅子が2番目だからです。これは、かつてモンテスキューやデュマが座っていた椅子です。

アカデミー・フランセーズの会員に選ばれるには、身分も階級も関係なく、能力だけだという点が特徴です。毎週木曜日の午後に全体会議が開かれ、午前中も分科会があります。私は辞書編纂の分科会に所属しています。

アカデミー・フランセーズの特徴は完全な独立性にあります。新しい会員が選出されると、入会の儀式が行われますが、庇護者である大統領のほうが一段下から挨拶します。会員は剣を携えています、それが象徴するのはフランス語という言葉の力です。

小倉（司会・通訳）：それでは、前置きはこのくらいにして、今回の大会のメインプログラムであるダニー・ラフェリエールさんと日本ケベック学会会長の立花英裕さんとの対談を始めたいと思います。私は司会（と一部通訳）をつとめさせていただきます、AJEQの会員で立教大学異文化コミュニケーション学部（共催）の教員の小倉和子と申します。よろしく願いいたします。

まず初めに、パリから遠路お越しくださいましたラフェリエールさんにお礼を述べたいと思います。ラフェリエールさんは2013年にアカデミー・フランセーズの会員に選出されましたが、先ほどもありましたようにこの秋からchancelierという重要な役についていて、会議を欠席することができないうえに、アカデミーはたくさんの賞の選考にも関わっているため、1か月に50冊もの本を読まなければならなかったそうです。そのうえ秋は文学フェスティバルなどの催しも多く、たいへんお忙しい中、2011年の初来日以来2度目となる来日をご快諾くださったことに、心より感謝いたします。

この対談のタイトル「書くこと 旅すること」は、ラフェリエールさんが1999年に、最初の10冊の小説（『アメリカの自伝』というタイトルでまとめられているものですが）を書き終えたときに、ジャーナリストのベルナル・マニエと行った対談のタイトル『書くこと 生きること』からとったものです。このマニエとの対談の翻訳がつい1週間ほど前に拙訳で藤原書店から出版さ

れました（今日はこの会場の外に藤原書店がブースを開いていますので、みなさんもぜひお手にとってみてください）。

この対談の原題は *J'écris comme je vis*（私は生きるように書く）であり、ラフェリエールさんにとって、書くことと生きることはほとんど同義であることが分かります。そして、書くことと旅することも同義なのではないかと考えて、本日の対談のタイトルをこのようにさせていただきました。

というのも、ラフェリエールさんはハイチの首都ポルトープランスで生まれましたが、プチ＝ゴアヴのお祖母さんの許で幼少期を過ごし、中等教育を受けるためにポルトープランスに戻りますが、卒業後ジャーナリストになると、その新聞が時の政権に抵抗していたために独裁政権の秘密警察から睨まれ、命の危険を感じてモンレアルに移住します。8年後に作家デビューしますが、その後も90年代はマイアミで過ごし、2000年になってモンレアルに戻って来ると、作家として講演や世界各国で開催される文学フェスティヴァルに招待されて多くの旅をします。さらに2013年にはアカデミー・フランセーズ会員に選出されて1年のほとんどをパリで過ごすようになりました。つまり、ラフェリエールさんはけっして旅行記作家ではありませんが、書きながら移動し、移動しながら書いていることになります。

そこで、今日はラフェリエールさんにとって、書くこと、旅すること、そして両者の関係などについてお聞きしたいと思います。それでは、さっそくお2人に対談をお願いします。

**立花**：ラフェリエールさん、あなたは大いなる旅人ですね。小説の中でも、多くの旅が語られています。しかし、ラフェリエールさんの場合、旅のための旅というよりは、必要に迫られた旅、理由のある旅、戻ることを想定していない旅であるようです。また、同時に、『帰還の謎』がそうであるように、「帰還」という、対比的な概念がどこかに隠れています。

それはそれとして、あなたにとっては3つの重要な場所があるようです。ハイチ、ケベック、フランス（4番目には日本が来るかもしれません）。あなたの旅は、時に命を賭けた旅でした。旅が人生そのものだったと言ってよいでしょう。しかし、アカデミー会員となった今、おそらく平凡な移動も多くなり、以前のような真の意味での旅がむずかしくなっているということはありませんか。旅は現在のあなたにとってどんな意味をもっているのでしょうか。

ラフェリエール：旅がむずかしくなった、というのは、私が年取った、という意味でしょうか（笑）。私にとっての旅は、まずもって芭蕉の旅です。「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり…」と始まる『奥の細道』の旅です。私の人生を形成してきたもの、といってもよいでしょう。

1976年の夏に私はモンレアルに到着しますが、最初は非正規滞在で、工場などで闇労働にたずさわっていました。

何か始めなければと思い、作家になる決意をしました。特別な技能も高価な道具も必要とせず、紙と執筆のための小部屋があればよかったです。その小部屋は友人とシェアしていたので、120ドルの家賃は半分で済みました。食べるものは、鶏の手羽先や骨つき肉ばかりでした。毎週水曜日に商品の入れ替えをするため投げ売りするものを買って食べていました。だから、生活するのにお金はかかりませんでした。

作家になってみると、その小さな部屋が明るく輝き、とても贅沢な空間に変わりました。何もないのに非現実的な力がそこに漲るのです。母はとても敬虔な人でしたが、その母からも遠いところにいて、自由に書いていたのです。安ワインを讃歌する文章を書いたこともあります。

1985年11月のある木曜日に最初の小説『ニグロと疲れしないでセックスする方法』を出版しますが、次の月曜日には有名人になっていたのです。それ以来、私は一度もお金を払わずに世界中を旅し、そのあいだに大勢の面白い人たちに会いました。

昨日も、飛行機から降りると、立花さんが空港まで迎えに来てくれました。ケベック文学に関する日本でもっとも影響力のある批評家で、学会長でもある人が直々に迎えに来てくれるとは、これ以上望むべくもありません。ホテルに到着すると、果物のかごとワインが届いていて、迎えに来た2人の日本人（\*立花と小倉のこと）が話したいことがあるからといって私の部屋までついてきました。ホテルの人は「いったいこの人は何者なのだろう」と思ったことでしょう。

私はフランス語で書くのですが、それがいろいろな言語に翻訳されます。それが文学の力、言葉の力なのです。私は移動する前からすでに旅している、といってもよいでしょう。北米大陸という資本主義の世界にありながら、お金が必要ないなんて、こんな素晴らしいことはありません。それもすべてアルファベット26文字のおかげなのです。

立花：あなたの小説を読むと、2つの「距離」に特徴づけられているような気がします。空間的な距離と時間的な距離です。通常「旅」と呼ばれているものは空間的な距離を踏破するものですが、時間的な踏破もあるのではないのでしょうか。あなたの小説において、子ども時代というのは特権的な場所を占めていますが、これは場所的な意味においてだけでなく（多くの読者にとってハイチは遠い国だから）、時間的な意味においても遠いものとして描かれているように思われます。この時間的次元の旅は、あなたが最初に出発したときから途絶えることのなかったものです。それは帰還なき旅であり、だからこそ、人生が旅であるという芭蕉の思想に共感なさるのではありませんか。

ラフェリエール：私の人生において「亡命」は重い意味をもってきました。ハイチから排除されてケベックに行きました。そこではずいぶん同情されたこともあります。しかし、人は皆「亡命者」ではないのでしょうか。空間的に亡命せざるをえなかった人たちは自分の人生を顧みて涙することもあります。けれども、時間を遡って子ども時代に戻ることは誰にもできないのですから、その意味では、皆が時間の「亡命者」なのです。

ところが、作家は子ども時代に戻ることができます。私は『コーヒーの香り』と『限りなき午後の魅惑』の中で子ども時代に戻ることができました。人々はいったいどうやって私がそんなに細かいことまで覚えているのか、と驚きます。しかし私は覚えているわけではありません。書いたことが本当である必要はないのですから。家族にはかならず「神話」があります。親たちが子どもにたいして「○○ちゃんは子どもの頃、こうだったんだよ」という話をします。それがいつか、子ども時代の「記憶」になるのです。私は10年間、じっと座って子ども時代を思い出そうとしていました。すると、自分の子ども時代の感情がよみがえり、再創造されるのです。

立花：あなたは『帰還の謎』（\* 2009年刊、メディシス賞）の中で次のように言っています。

帰路の切符をもたぬ旅だけが  
家族、血縁、  
狭い愛郷心からぼくらを救うことができる。

自分が生まれた村を一度も離れたことのない者は  
不動の時間の中に居座り、  
それがしまいには  
性格にとって有害であることが明らかになる。

また、『若いニグロの手の中の柘榴は武器か、それとも果物か?』（\* 1993年刊）は女性週刊誌の求めに応じてアメリカ合衆国を横断しながら書いたものですが、「旅」の章の次の一節はブルーストを思い出させます。

夜、私はホテル（高速道路のそばに見つけたデイズ・イン）のベッドの上にウォルト・ホイットマンの大いなる書物『草の葉』を参謀本部の地図のように広げて横になる。

そこで、真夜中に、自分がどこにいるのかも分からずに目覚めたところだ。このきわめて奇妙な平凡さの世界で、完全に我を見失っている。

『失われた時を求めて』でも、冒頭に、夜中に目を覚まして自分がどこにいるかわからないという記述があります。目覚めには、存在の原点があるのかもしれませんが。そして、旅もまたそうした原点に目覚めさせてくれるのかもしれませんが。あなたはよく、ハイチの作家ではない、とおっしゃいます。その理由はいくつかありますが、一つには、旅を通してアイデンティティを構築したのであり、旅という試練の中で作家としての自己を形成してきたからだと言えるのではないのでしょうか。

ラフェリエール：私はなにも、旅だけで自己形成してきたわけではありません。子どもの頃、叔母の1人が務めていた図書館でさまざまな人が書いた本を読みました。ですから、私は図書館から生まれたともいえるし、さらには、コーヒー茶碗から生まれたということもできます。というのも、祖母がいつも、コーヒーを用意して、近所の人が通りかかるとを待っていたからです。こうして私は、人を楽しませるために話をつくることを覚えました。だから私の話は知性によって理念的なものを表現するのではなく、日常生活、人々のつながりを表現する人間的な物語です。

私はお金が欲しかったわけではありません。娼婦のようにお金を求めたわけでもありません。しかし、お金で買えるすべてが欲しいという気持ちはあ

りました。それが書くことへと私を向かわせたのです。普通、亡命者や移民は3代を経ないと欲しかったものが手に入らないといわれます。彼らの第1世代は犠牲者です。第2世代が一步踏み出し、第3世代目にしてようやく欲しいものが手に入ります。しかし、私はそのような運命論や呪詛は信じません。作家になることによって、そこを一気に飛び越えることができました。

立花：そろそろ残り時間が少なくなってきましたので、最後に、スライドについて説明していただけますか。

ラフェリエール：これが私の最後の「旅」になりますが、それは機械から手への「帰還の旅」です。アカデミー・フランセーズに入ってみて、「手」がいかに重要な道具であるか、気づかされました。私はタイプライターで書く作家から始めて、これまで手書きで絵を描くことも文字を書くこともなかったのですが、これらのスライド（\*『猫のいるパリの自画像』2018年刊より）にあるように、挿絵も文章もすべて手書きで書き始めました。すでに850ページ書いています。

（挿絵を説明しながら）これはカニにとり囲まれ、囓まれている人間です。カニは人々が日々私に要求してくる細々としたものを表しています。そういうものを排除して「手」に戻ろう、というわけです。また、これはアルファベット礼讃です。というのも、この26文字が私の人生を変えてくれたからです。現在、私はパリ10区の庶民的な地区に住んでいますが、この絵は部屋の窓から見た界限を描いています。こちらはマルローですが、彼は生前ハイチを訪れました。墓地でハイチの画家の絵を見て、ハイチ人は苦しまずにあの世に行く方法を知っていると思いました。こちらはブルトンとエメ・セゼール。ブルトンも1945年にポルトープランスを訪れています。そして、こちらはパリを訪れたボルヘス、それにバスキア。私はこれまで一度も絵を描いたことはないのですが、やってみました。そうしたかったからです。描く権利はありますよね。

これらはいわば、文章の引用ではなく、絵の引用です。私は手の力を取り戻しているのです。というのも、今やインターネットが発達して、メールが瞬時に相手に届き、15分返事がないと差出人は怒り出すという有様です。しかしアカデミー・フランセーズでは今もすべてが手書きで、郵便で送った手紙が1週間して相手に届き、その返事がもう1週間して戻ってくるという、

ゆったりとした時間が流れています。これは人間の感情にとってより自然な時間でしょう。私たちは手の力を学び直さなければなりません。電気も不要で、人とのあいだに距離をつくる機械を介在させることのない、手という直接的な道具です。これこそが語の力を取り戻させてくれるのです。

小倉：ラフェリエールさん、どうもありがとうございました。すでに予定の時間は過ぎていますが、せっかくなので、会場から何かご質問はありませんか。

質問者（関）：ハイチからモンレアルに到着して、8年間下積み生活をしたとのことですが、その間どんなことを感じましたか。

ラフェリエール：この期間は私が知らなかったことを知ることができた重要な時間でした。第三世界の知識人だった私はハイチでは肉体労働をしたことはありませんでした。それがモンレアルに来て、工場労働者や清掃人として働き、自由やフェミニズムなど、ハイチではまったく知らなかったことを学びました。それこそが旅の意味です。

もっとも違っていたのは寒さであり、氷でした。寒さはお金持ちにとってはスキーを意味するかもしれませんが、貧乏人にとっては足の冷たさにほかなりません。それでも私は幸福や寂しさの学校で学び、はじめて読者と会えることができました。

小倉：ラフェリエールさん、今日はたいへんありがとうございました。

（訳：立花英裕・小倉和子）

~~~~~  
(参考資料)

ダニー・ラフェリエール略年譜（小倉和子作成）

1953年 ハイチ、ポルトープランスで誕生。プチ＝ゴアーヴの祖母（通称ダー）のもとで少年時代を過ごす。

1964年 ポルトープランスの母親のもとに戻り、聖心修道士たちが経営する学校で中等教育を受ける。

- 1972年 ラジオ・ハイチ＝アンテール、週刊新聞「プチ・サムデイ・ソワール」、日刊紙「ヌヴェリスト」で働きはじめる。
- 1976年 政局混乱。「プチ・サムデイ・ソワール」紙は政権から睨まれ、同僚が秘密警察員に暗殺される。ダニーはあわただしくハイチを出国し、モンレアルに到着。
- 1985年 8年間、不安定な様々な仕事を経験したのち、処女作『ニグロと疲れないでセックスする方法』で作家デビュー。
- 1986年 デュヴァリエ親子により30年近く続いた独裁政権の終焉。
- 1987年 『エロシマ』発表。
- 1990年 家族とともにフロリダ州マイアミに移住し、執筆活動に専念。
- 1991年 『コーヒーの香り』（カリブのカルベ賞受賞）発表。
- 1992年 『乙女たちの好み』発表。
- 1993年 『若いニグロの手の中の柘榴は武器か、それとも果物か？』発表。
- 1994年 『甘い漂流』発表。
- 1996年 『帽子のない国』発表。
- 1997年 『主人の肉体』、『限りなき午後の魅惑』発表。
- 2000年 『<sup>カツオドリ</sup>狂い鳥の叫び』発表後、モンレアルに戻る。『書くこと 生きること』発表。
- 2001年 『ぼくは疲れた』発表。
- 2006年 児童書『ヴァヴァに首ったけ』（カナダ総督文学賞受賞）発表。
- 2008年 『吾輩は日本作家である』発表。
- 2009年 児童書『万聖節』、『帰還の謎』（モンレアル書籍大賞とメデイシス賞をダブル受賞）発表。
- 2010年 ポルトープランス滞在中の1月12日、ハイチ地震を経験。3か月後に『ハイチ震災日記』を緊急出版。
- 2011年 『ハイチ震災日記』、『帰還の謎』邦訳出版。初来日。『無為というほとんど失われた技法』発表。
- 2012年 『ニグロと疲れないでセックスする方法』邦訳出版。
- 2013年 『パジャマ姿の作家の日記』発表。アカデミー・フランセーズ会員に選出される。
- 2014年 児童書『ヴァヴァの薄紫色のキス』発表。『吾輩は日本作家である』、『甘い漂流』邦訳出版。
- 2015年 『モンゴ、みんなが君に言ってくれないすべてのこと』発表。

2016年 『アメリカの神話』 発表。

2018年 『猫のいるパリの自画像』 発表。

2019年 『対岸へ』 発表。2度目の来日。